

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2007～2010

課題番号：19251006

研究課題名（和文） 西アジアにおける「一神教」の成立に関する実証的総合研究

研究課題名（英文） Demonstrative-Synthetic Research on the Formation of 'Monotheism' in Western Asia

研究代表者 月本 昭男 (TSUKIMOTO AKIO)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10147928

研究成果の概要（和文）：

本研究はユダヤ教,キリスト教,イスラム教における神観につき,比較宗教史的観点から、4.で述べるように、四つの側面から実証的総合研究を行った。そのうち、(1)「古代ユダヤ教における一神教成立の解明」については、下ガリラヤのテル・レヘシュ遺跡発掘調査により、古代イスラエル最初期の宗教に関する実証的なデータが発見され、成果の一部はV国際宗教史会議（トロント大学、2010年8月）および「国際ガリラヤ会議」（立教大学、2011年5月）で公表した。(2)～(4)の課題の研究成果については、以下の報告4を参照されたい。

研究成果の概要（英文）：

This research aims at elucidating the nature of the concepts of god in Judaism, Christianity and Islam from the viewpoint of comparative history of religions. The research consists of four subjects that will be mentioned in part 4 below. Concerning the subject (1) "the emergence of monotheism in the ancient Judaism", we unearthed a lot of archaeological materials through the excavations at Tel Rekhesh in the lower Galilee. The result of this research was presented partly at the Congress of the International Association of the History of Religions held at the University of Toronto (August 2010) as well as at the international conference "Perspectives from the Periphery – Galilee in the Cultural Changes through Ages" held at Rikkyo University (May 2011).

Concerning the results of the research subjects (2)-(4), see the report 4 below.

交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2007年度 | 8,500,000  | 2,550,000 | 11,050,000 |
| 2008年度 | 7,400,000  | 2,220,000 | 9,620,000  |
| 2009年度 | 7,500,000  | 2,250,000 | 9,750,000  |
| 2010年度 | 8,000,000  | 2,400,000 | 10,400,000 |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 31,400,000 | 9,420,000 | 40,820,000 |

研究分野：宗教史学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：一神教の成立、古代イスラエル宗教、古代エジプトの宗教、多神教、生命の木、聖書考古学

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代後半から「一神教対多神教」という比較宗教研究がなされるようになるが、そ

の際、どちらが優れた宗教か、という価値判断が隠れた形で下されてきた。そうした研究動向に対して、本研究は一神教成立の経緯と

その展開を実証的立場から明らかにすべく開始された。

## 2. 研究の目的

上に述べたように、本研究の最大の目的は西アジアにおける一神教（具体的には古代イスラエル宗教）の成立経緯と展開を実証的に跡づけることにおかれる。

## 3. 研究の方法

(1) 古代ユダヤ教における一神教成立解明に関する従来の研究は主として文献に偏重してきた。ようやく今世紀に入り、Ziony Zevit, *The Religions of Ancient Israel: A Synthesis of Parallaxic Approaches* (London and New York: Continuum, 2001) と言った、考古学的資料にも目が向けられるようになった。しかし、特にイスラエル「出現」とともに一神教はパレスチナに登場したか、という問題を決定しうる十分な考古資料が存在せず、後期青銅器時代から初期鉄器時代にかけての宗教遺物の研究は学界全体の急務である。こうした事情を踏まえ、後期青銅器時代から鉄器時代にかけて連続して居住があると目されていたイスラエル、ガリラヤ地方のテル・レヘシュにおいて宗教遺物とその考古学的文脈を明らかにすべく発掘を行い、その分析を通して一神教成立の文化的背景を明らかにする。

(2) デカポリス地方に残るユダヤ教およびキリスト教に関する研究は、(1) で述べた発掘調査と並行して、地域的には主にヨルダン溪谷の西地域を中心に、紀元前1世紀からビザンチン時代にいたるシナゴグ遺跡や教会遺跡に残された床モザイクの調査を実施し、それらを資料に図像学的な分析を行った。

(3) 地中海世界に展開した初期キリスト教の世界観の成立経緯の宗教史研究は、本研究実施期間中、毎年、トルコ半島およびギリシア本土の沿岸地域に残るキリスト教遺跡の踏査を実施した。そのうえで、文献資料に基づく初期キリスト教研究の成果の再検証を行った。

(4) 古代西アジアおよび東アジアの資料に基づく「多神教対一神教」の再検討に関しては、基本的に、研究分担者それぞれが個別に研究を進めたが、年に一度もしくは二度の割合で、合宿や研究会を開催し、情報共有を図り、意見交換を行った。2008年度には、ハイファ大学のN・シュバク教授(エジプト学)を囲む研究会を開催した。

## 4. 研究成果

(1) 古代ユダヤ教における一神教成立解明のため、イスラエル国ガリラヤ地域、テル・レヘシュ遺跡において2007-2010年度にかけて、4度の発掘調査を行った。以下がその成果である。

### ①後期青銅器時代と鉄器時代I期

後期青銅器時代と鉄器時代I期の移行は前1200年前後と考えられ、かつては前者の破壊層をヨシュア記に描かれるイスラエルの民によるカナン都市の征服と結び付けられて解釈されていた。ところが、最近、少なくともガリラヤ地域においては、後期青銅器時代末から鉄器時代最初期にかけて、文化の断絶よりも連続性が指摘されている。テル・レヘシュにおける後期青銅器時代から鉄器時代への移行期を厳密に調査することは、この地域のイスラエル時代を理解するためにも、重要な課題となっていた。まず、テル下段のテラス北側に位置するC地区では、複数の部屋を有する鉄器時代I期の建造物が出土した(図1)。



図1 C地区の建築遺構

さらに、その北側の下層からは後期青銅器時代の遺構が検出された。他方、鉄器時代I期とみられる建造物の一部には、複数の石柱が並ぶ部屋が発見されている。また、同一建造物の別の部屋からはカルト・スタンドと呼ばれる祭祀(図2)、生命の木(ナツメヤシ)をあしらった土器片、焼成粘土の仮面の一部なども出土した。つまり、この複合建造物は鉄



図2 カルトスタンド

器時代I期の宗教施設であった可能性が高い。

後期青銅器時代から鉄器時代への連続性が確認されるのは、D地区である。ここからは、鉄器時代 I 期後半に破壊され焼失した長方形の建造物 (13m×8m) が出土し、その中央からオリーブの搾油施設一基がほぼ完全な形で発見された (図 3)。同一建造物の別の地点



図 3 出土した搾油施設

にも別のオリーブの搾油施設が確認されている。また、その西側の部屋の床面からは後期青銅器時代後半の土器が出土しており、この地区の建造物自体は後期青銅器時代に建造され、鉄器時代 I 期に改装されて使用されたものとみられる。遺跡の南端部分でも、2基の搾油施設と目される遺構が発見されているが、それに伴う土器からみて、こちらの遺構は鉄器時代 I 期に年代づけられよう。いずれにしても、ここには、後期青銅器時代から鉄器時代 I 期にいたる文化の断絶はみられない。

#### ②鉄器時代 II 期とローマ時代

テル頂上の平坦部は、鉄器時代 II 期には方形の周壁が築かれ、要塞として利用されていたと考えられる。それはすでに地形からも想定されたことであったが、F地区の発掘調査でより鮮明になった。そこから遺跡を東西に直線的にはしる強固な二重の要塞壁 (幅 1.5m と 1.1m) が発見されたからである (図 4)。



図 4 鉄器時代 II 期後半の要塞遺構

出土土器から判断すると、この建造物の年代が鉄器時代 II 期後半に属することは間違い

ないが、より厳密に、それが北イスラエル王国時代か、それとも王国滅亡後のアッシリア属州時代か、という点は検討の余地を残すと同時に、その結論はイスラエル史の上でも重要な意味をもってくるだろう。さらに楽器を持った女性小像断片が二体出土した (図 5)。

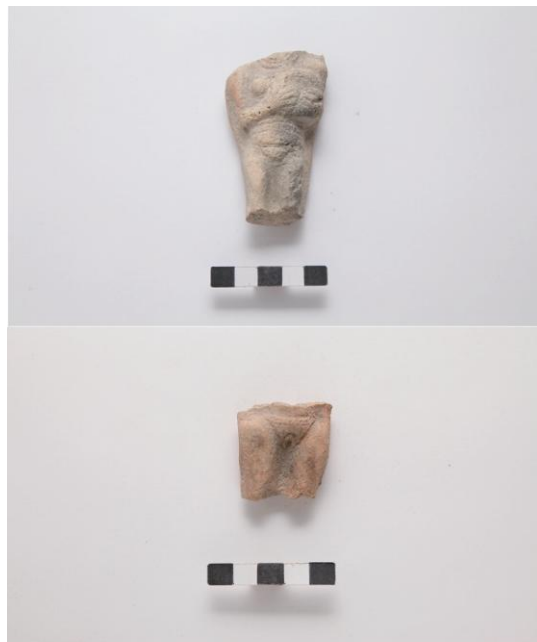


図 5 出土した女性土偶破片

テルの最頂部にはローマ時代とみられる複合建造物の崩れた石組み遺構が露出している。この遺構のおおよその輪郭については、宇野隆夫氏の協力で図面化しえたと同時に、その一部で試掘を行った。その結果、この遺構がローマ時代初期に典型的な「ファーム・ハウス」と呼ばれる建造物に類似していることも判明した。また、発掘調査ではオリエント式の石臼や磨石が出土しており、さらにはユダヤ教の祭司層が穢れを避けるために使用したといわれる、石灰石製の容器の破片も発見されている。こうした痕跡はヘレニズム時代には居住のなかったテル・レヘシュに、ローマ時代になってから、農業に従事する小規模な集団が入植したことを示唆しているだろう。それがユダヤ人の共同体であったのかどうかを考古学的に確認する課題は今後に残されている。

(2) デカポリス地方に残るユダヤ教およびキリスト教に関する研究の成果は、なによりも、ガリラヤ地方に残るローマ時代からビザンチン時代のシナゴグの床モザイク図像にローマ・ヘレニズム文化の影響が観察されたことにある。唯一神を鮮明にして偶像を排除したユダヤ教のシナゴグにおいて、その床モザイクには形を変えたヘリオス神を中



心とする黄道十二宮や四季を象徴する女神たちが描き出されていたのである。一部の図像学研究者以外には知られていなかったこうした事実は、ユダヤ教ひいてはキリスト教における偶像理解を再考させずにはおかない。また、(1)の調査研究で検出されたローマ時代の「ファーム・ハウス」について、最終的な結論を出すには、さらに今後の発掘調査を要するが、当該複合建造物の人部屋が彩色フレスコの部屋壁を有していた事実は、紀元1世紀のガリラヤにおいて農耕に従事していたユダヤ人社会にもローマ風文化が浸透していたことを示している。これらの成果は、まずは、2011年5月27-30日に研究代表者の勤務する立教大学で開催される国際会議「辺境からの視座—古代ガリラヤの文化諸相とその歴史的意義—」において研究分担者及び研究協力者により発表される予定である。

(3) トルコ半島およびギリシア本土の沿岸地域に残るキリスト教遺跡の踏査研究は以下の成果をもたらした。

①パウロはその伝道旅行で、現在のトルコを都合三度ほど、足で横断したばかりでなく、ギリシャを二度ほど縦断しているが、それは全数千キロにわたる距離であり、それを踏破したパウロのエネルギーには驚愕の念を新たにせざるを得ないこと。

②パウロがトルコ大地を動くに際して主として辿ったのは、「皇帝街道」(Via Sebaste)および「イグナティア街道」(Via Egnatia)であり、それは当時のローマ帝国が軍事・経済上の必要上創設したハイウェイであり、それを再利用する形でパウロの伝道は進められたこと。

③パウロが伝道の標的にしたのは、当時の大都会、およびローマの「植民都市」(Colonia)であったこと。植民都市は、いわばローマの分身のような格付けの都市で、退役軍人を核にした、特権をあたえられたローマ人によって構成されていた。パウロが何よりもこうした都市を中心に宣教し、いわゆる「田舎」には全く足を運んでいなかったことは、パウロの「ローマ・イデオロギー」とでも言うべき特質である。ガリラヤに端を発する「一神教」の展開形態であるキリスト教と、世界帝国ローの軍事的経済的支配との当初からのこうした相互依存は、新たな分析と理解を要請するように思われる。

(4) 古代西アジアおよび東アジアの資料に基づく「多神教対一神教」の再検討は、上記のように、相互の意見交換を行いつつも、本能的には研究分担者各自がそれぞれの領域

において研究を進め、またそれぞれにその研究成果を論考にして発表した。それらのなかで、研究分担者が共有しえた共通認識のひとつは、多神教と一神教の概念規定自体が学術用語として多くの曖昧性を残しているということであり、両者を対立的にとらえる発想自体が、ヨーロッパによる東洋の発見さらには第3世界の植民地化という歴史的背景をもっていたことであった。そうした成果を研究代表者は「一神教と多神教」(星野英紀他編『宗教学事典』(丸善、2010年、302-305頁)として公表した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 356 件)

① 月本昭男ほか、Tel Rekhes 2009: Preliminary Report、Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel 123 巻 (2011)、Web 出版 ([http://www.hadashot-esi.org.il/report\\_detail\\_eng.asp?id=1678&mag\\_id=118](http://www.hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.asp?id=1678&mag_id=118))、査読無

② 月本昭男、旧約聖書に見る救済史と創造信仰、関根正雄 10 周年記念講演集、(2011)、23-45、査読無

③ 月本昭男、Peace for the Dead, or Kispu (m) Again、Orient 45 巻、(2010)、101-109、査読有

④ 月本昭男ほか、Excavations at Tel Rekhes、Israel Exploration Journal 60 巻、(2010)、22-40、査読有

⑤ 鎌田繁、Transmigration of Soul (tanasukh) in Shaykh al-Mufid and Mulla Sadra、Orient 44 巻、105-119 (2009)、査読有

⑥ 月本昭男、負債としての罪—第二イザヤに見る動詞「贖う」—、キリスト教学 51 巻、(2009) 105-120、査読有

⑦ 月本昭男、下ガリラヤ・テル・レヘシュ遺跡発掘調査報告、キリスト教学、51 巻、(2009) 105-120、査読有

⑧ 月本昭男、古代メソポタミアにおける死生観と死者儀礼、西アジア考古学 第 8 号、1-10 (2007)、査読有

[学会発表] (計 87 件)

① 月本昭男、下ガリラヤ・テル・レヘシュ遺跡発掘調査報告、立教大学キリスト教学会、2009年5月30日、立教大学

[図書] (計 723 件)

① 月本昭男、新教出版、詩篇の思想と信仰 III

第 51 篇から第 75 篇まで、2011、344 頁  
②月本昭男、岩波書店、古代メソポタミアの  
神話と儀礼、2010、392 頁

[その他]

ホームページ等

<http://rekhesh.com/rekhesh.com/Home.htm>

1

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

月本 昭男 (TSUKIMOTO AKIO)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10147928

### (2)研究分担者

佐藤 研 (SATO MIGAKU)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00187238

山我 哲雄 (YAMAGA TETSUO)

北星学園大学・経済学部・教授

研究者番号：80230332

市川 裕 (ICHIKAWA HIROSHI)

東京大学大学院・人文社会系研究科・教授

研究者番号：20223084

澤井 義次 (SAWAI YOSHITSUGU)

天理大学・人間学部・教授

研究者番号：30178826

鎌田 繁 (KAMATA SHIGERU)

東京大学・東洋文化研究所・教授

研究者番号：70152840

池澤 優 (IKEZAWA MASARU)

東京大学大学院・自分社会系研究科・准教授

研究者番号：90250993

河東 仁 (KAWATO MASASHI)

立教大学・コミュニティ福祉学部・教授

研究者番号：80224799

### (3)連携研究者

なし